

可能世界の複数性について

倉 持 武

10月7日に行われた中部哲学会2001年度大会のシンポジウム「論理と世界」において、複数世界の可能性を前提とする報告があった。「複数の世界」は形式の点からみて3つのタイプが考えられよう。一つめは、形式論理学的世界、超越論理学的世界、現実世界という階層的な複数世界であり、複数性の可能性の条件は論理の複数性、それぞれの世界を制約している論理の差異である。二つめは、客観的世界は一つだが、これを観るパースペクティブの違いによって現象してくる複数の世界である。複数性の可能性の条件はパースペクティブの複数性ということになる。三つめが、複数の可能世界であり、「全知全能な神は多くの可能な選択肢から自由に選択して、世界を創造する」といった言説にあらわれる世界である。筆者が渋谷氏と戸田山氏に質問したのはこの可能世界の複数性についてであった。

両氏は「様相論理と可能世界論」という共通テーマで報告されたが、議論の目的はそれぞれ異なっていた。戸田山氏の報告は物理主義者の立場から、「様相論理の標準的セマンティクスである可能世界意味論はヘビーな存

在論をもつ」のだが、「実り豊か」である。「可能世界への存在論的コミットメントを避けて、様相論理を使い続ける」にはいかなる方が採られるべきかという課題の下での議論であった。渋谷氏の報告は、可能世界意味論という現代哲学のテーマがドゥッス・スコトゥスやオッカムにおいてすでに現れているが、これはスコトゥスやオッカムがアウグスティヌスの影響の下に、アリストテレスの様相概念、通時的様相概念 (diachronic modalities) とは異なる、共時的様相概念 (synchronic modalities) を発展、体系化させたことによることを示そうとするものであった。両氏の立論は共に「可能世界の複数性」の可能性を前提する議論であって、可能世界の複数性の可能性が否定されるなら崩壊してしまう。戸田山氏の立論は複数可能世界の可能性、つまり無矛盾性が示されさえすれば破綻することはないだろう。しかし渋谷氏の立論が成立するためには単なる複数可能世界の可能性だけではなく、複数可能世界の構成原理の提示も要求される。さらに渋谷氏にはスコトゥスやオッカムが示した可能世界の構成原理が構成原理として有効であることを、か

(2001年11月12日受理.)

れらになり代わって証明する義務があると考える。さもなければ、渋谷氏の提題は単なるスコトゥス、オッカム解釈に止まるものとなり、研究発表ならいざ知らず、シンポジウム提題としては意味をなさなくなるからである。

「オッカムは“神はこの世界とは別な、より良い世界を造ることができる”と述べ、この世界の非必然性を強調している」とする渋谷氏の主張を手がかりにして質問の趣旨を再現しよう。ここでいわれている「世界の必然性」は、自然必然性ではなく、論理的必然性である。この世界の必然性は、そしてその世界内存在者の必然性は、それが個物であるか、種であるか、類であるかに関わらず、「ある特定の現実世界において成立している自然の因果法則に基づく弱い意味での必然性であり、このような必然性は神によって変えられることができるがゆえに、論理的には非必然である」。これに対し、論理的必然性とは「すべての可能世界において成立する強い意味での必然であり、全知全能の神もそれを変えることができない」。この「論理的必然性」に対応する様相概念が「論理的可能性」である。論理的に可能な存在 (*esse possibile logicum*) は神の知性の中の *esse intelligibile* であり、「それが存在することが論理的に矛盾を含まない (*cui non repugnant esse*)」ことのみを存立条件とするものであるから、「実在的なもの (*res*) の何らかの可能性から得られる」実在的に可能な存在、実在性 (*realitas*) を有するものではない。

スコトゥスによれば、論理的に可能なものの存在領域は神の知性の内にある。論理的に可能なものは「神の知性によって形成され、考えられ、認識されうるもの」であるから、矛盾を含んではならない。「全知全能の神はその絶対的能力によってあらゆることができ

るが、矛盾を含むことはできない」からである。オッカムはこれをさらに発展させ、論理的必然性と実在的必然性との区別を、固有性 (*proprium*)、分離されえない付帯性 (*attributa*, 属性と呼んでおく)、分離されうる付帯性 (*accidentia*, 様態と呼んでおく) の概念に即して説明する。固有性、属性、様態はともに矛盾を含んではならないことはいうまでもないだろう。ただし、「Qが存在することが論理的に矛盾を含まない」という基準によって、「例えばキマエラは論理的に可能な存在から排除される」という主張には同意できない。たとえこれが渋谷氏ではなくオッカムの主張であってもである。キマエラということ「顔と体がライオン、胴から山羊の頭が生え、蛇の尾をもつ怪物」と定義するのではなく、スフィンクス、グリフォン、ペガサスも含むように「異なった種の遺伝子または細胞が一つの個体内に共存する状態」と定義するならば、キマエラは現実にくらでも存在するからである。鳥類で最初のキマエラは、ウズラとニワトリの神経管キマエラで、これは1985年にニコル・ルドウァランと絹谷政江によって創られた。遺伝子組換え技術はキマエラ製造技術なのであり、哺乳類でもヒトの遺伝子を組み込んだブタが、移植用肝臓供給のため大量に製造されているのである。キマエラは自己矛盾する概念であるがゆえに存在し得ないのではなく、単に製造技術がなかったがゆえに存在しなかったのだと考えるべきである。ある概念が自己矛盾を含むか否かは簡単には決められないのである。

ところで、固有性とは「神は実体 *x* が性質 *p* を持たない世界を造ることが不可能」な場合の、実体 *x* の性質 *p* であって、固有性はある種のメンバーすべてに「適合し」、「そのメンバーのみ」に適合し、「常に」適合するものである。それゆえ固有性はある実

体について論理的必然性を持つ。「笑うことができる」が人間の固有性とされている。属性とは「我々の現実の世界においては、実体（基体）から自然本性的に分離されることは不可能であるが、神の力によって分離することは可能なもの」である。それゆえ属性はある実体について自然本性的必然性を持つが、論理的には非必然である。「熱い」という性質は「火」について、「理性的動物」という性質は「人間」についてそれぞれ自然本性的に必然であるが、論理的には非必然である。また人間が現実世界に存在していることも自然本性的には必然であるが、論理的には非必然とされている。様態とは「我々の現実の世界において実体から自然本性的に分離されることが可能な」性質である。ここまでは質問の前提であり、渋谷氏のスコトゥス及びオッカム解釈に異議を差し挟もうなどは毛頭考えていない。

問題は可能世界の複数性がこれまでの説明から導出できるかということである。神の知性の中に可能世界 W1 と W2 があるとしよう。渋谷氏の説明によれば、W1 と W2 を区別する原理が二つある。一つは W1 には、たとえば、人間が存在するが、W2 には人間が存在しないというような、世界内存在者の種類の違いという世界の区別原理である。しかし世界内存在者の違いによって W1 と W2 が区別可能だとする考えには疑問がある。まず第一に、そのためにはすべての世界内存在者が知られていなければならないと思うが、これは不可能だろう。「ヤンバルテナゴコガネアカネは W1 には存在するが、W2 には存在しない」の真偽決定が可能だとは考えられない。第二に、人間の存在しない世界は20数万年前のこの現実世界のことであって、別の世界の出来事ではないということがある。世界の複数性を必要とせずに「人間の

存在する世界」と「人間の存在しない世界」の違いを説明できるのである。進化の話を持ち出してはいけないというのなら、トランス・ウラニウム・エレメントはどうだろう。これらは50年前には存在しなかった元素が最近進化して存在するようになったというわけのものではない。超高速加速機を使用して人工的に作られたのである。水素からウラニウムまでが存在する世界とトランス・ウラニウム元素までが存在する世界とは別の可能世界なのではない。

第三に、W1 内存在者も W2 内存在者も、それが存在する限り自然必然性は有するが、論理的必然性もっていないことから話が始まっていることに注意しなければならない。論理的可能性しかもたない存在者、偶然的存在者、在っても無くても当の世界の存立には関わらない存在者の存在・非存在を、当の世界の存立の可能性の条件とすること自体矛盾していると考えのだが。

もう一つは、W1 における「火は熱い」が、W2 においては「火は熱くない」というように、ある実体の属性の違いに基づく世界の複数性であり、別の世界に属する同一の実体の属性（分離し得ぬ付帯性）の複数性が世界の複数性の構成原理となる。この場合にもまた、論理的に非必然な属性を持ち出して世界の論理的な複数性を導出しようとする矛盾が当然疑われる。この他に、「熱い火」と「熱くない火」における「火」の同一性を示すものは何かという問題が生じると考える。

「火」の基体と固有性を的確に示すことはできないのだが、仮に、「火」の基体を「発光体」としてみよう。するとこの現実世界には、熱い火と熱くない火（ホタルのひかり、チョウチンアンコウの提灯の発光液など）が存在するから、属性の複数性を持ち出すことによって、世界の複数性を導出するどころ

か、「熱い」がそもそも「火の分離し得ぬ付帯性」でさえないということを見出すだけという結果になる。そこで今度は仮に「火」の固有性を「温かくて、乾いたもの」としてみよう。すると、「熱くない火」は「冷たくて、乾いたもの」ということになるが、これは「土」のことだから、「熱くない火」は土の別名にすぎないということになる。これは「熱い火」の存在する世界と「熱くない火」の存在する世界という二つの世界の存在可能性を示しているのではなく、一つの実体は名前を二つもつことがあるということを示しているにすぎない。世界内存在者の差異も、同一実体についての分離し得ぬ付帯性の複数性も可能世界の複数性構成原理とはなり得ないのである。

可能世界の論理的可能性の唯一の制約は無矛盾性である。もし「可能世界の複数性」が思惟可能であるなら、可能世界 W 1 と可能

世界 W 2 の区別原理も無矛盾でなければならない。この区別原理を倉持の原理と呼ぶことにする。さて、この原理は W 1 と W 2 を区別しなければならないから、矛盾律だけから構成することはできない。矛盾律だけから構成された原理は一つの可能世界の論理的可能性、無矛盾性を示すだけであって、W 1 を W 2 から区別することはできないからである。ところが、可能世界の唯一の論理的制約は無矛盾ということであるから、この区別原理は矛盾律だけから構成可能でなければならないのである。さもなくば、この可能世界は唯一の制約、矛盾律以外の制約をもつことになるからである。これはパラドックスである。つまり倉持の原理なるものは存在し得ないのであり、同時に、可能世界の複数性なる概念は自己矛盾した概念だ、ということなのである。